

決戦の 時戦

遠藤周作

決戦の時 下

江苏工业学院图书馆
藏书章

遠藤周作

決戦の時 けつせんとき 下巻

一九九一年五月二〇日 第一刷発行

著者——遠藤 周作 えんどうしゅうさく

© Syusaku Endo 1991, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二―〇一
電話

出版部(〇三)五三九五―三五〇四

販売部(〇三)五三九五―三六二二

製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円(本体一二六二円)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目

次

不安

150

攻撃拠点

135

美濃攻略

102

藤吉郎の初陣

71

布石

54

奇策

27

嵐来る

7

安土、
長浜

295

母

276

お市

254

小谷城

230

朽木総退却

208

長政の苦悩

187

義昭の運命

166

装帧 永原康史

決戦の時

下巻

嵐来る

永禄三年、五月十日。

今の暦で言えば六月十三日の梅雨の季節である。雨はなかったがむし暑かった。

今川義元の先発隊二千はむっとするような街道を西にむけて出発した。

先発隊の指揮者は井伊直盛。彼は部隊を二つに分け、自分は十二日に駿府城を出陣する本隊と連絡するために先発隊の殿しんがりにいた。

「いよいよ」

村々では村長や神主たちが路に出て挨拶をした。

「駿府さま（義元のこと）は明後日、ここを御通過になる。粗相あつてはならぬぞ」

騎馬武者二、三人が村や集落を通過しながら大声で布告をだす。

やがて隊列が街道からあらわれる。笠の下に汗をかき、銃や槍を持った足軽たちは、ついこの間までは田や畠を耕していた百姓たちだった。追立夫おつたてふ（徴発人夫）もおなじような農民で、

彼等は荷駄にだを引いてやってきた。

十二日、駿府を出た本隊はその夜、藤枝に泊った。本隊の先鋒せんぽうを命じられたのは、後の徳川

家康である。

家康が当時、家康と名のついていたかどうかは明らかでない。元康という名を使っていたことだけは確実で、これはその署名の文書によってわかる。

読者はもちろん御承知であろうが、家康は今川家の人質として育てられ、この年にいわば初陣とんじんとも言うべき寺野城攻めを行っている。

十三日、本隊、藤枝を立て掛川に着陣。

十四日、現在の豊田村にあたる池田原で諸隊、総揃えを行った。

この夜、義元の幕屋まくやに元康はよばれ、

「岡崎衆には大高城に兵糧ひょうりょうを入れ、信長の丸根砦を与えるつもりである」

義元は酒杯を片手ににこにこ笑って言った。

「与えるつもり」という言葉は命令であって、これに背くわけにはいかない。

「は」

と元康は頭をさげた。彼は心のなかで、この時こそ岡崎衆の強さを駿河するがの面々に見せねばならぬと思った。長年の苦勞、屈辱をはねかえす絶好の好機である。

十五日、本隊は浜名浦をわたって吉田。しかしその先頭は既に現在の豊川に着陣している。

十六日、義元、岡崎に到着。

十七日、岡崎出発、本陣ちりゅうを知立に移した。

このあたりから、いよいよ信長の前線と接触しはじめる。

まだ戦は始まっていない。しかしもう合戦の第一段階といつてよい。
十八日。

義元の本陣は岡崎から現在の愛知県・豊明市に残る沓掛城に移動した。
夜、軍議が開かれた。

燭台が幾つか並べられ、その炎のまわりをあげ放した庭から飛んできた蛾が飛びまわっていた。

「おそろく明日」

と重臣おとこの一人、葛山信貞が一同を見まわした。

「信長の軍勢とあいまみえよう。先陣はこの信貞が承うけたまわりたい」

しばらく議論が沸騰ふっとうした後、信貞の意見が通った。本隊の後詰めは三浦備後守。

尾張との国境くにぎわいに入れば、今川方には二つの拠点が南北にある。北の鳴海城なるみと南の大高城である。

だが信長はこの二拠点を分断するために、ちょうどその中間に鷺津、丸根の砦をつくった。
だから明日の戦はこの二つの砦の攻撃からはじまる。そのことは今川方の重臣、みな心得ている。

「備中守は」

と義元は微笑しながら朝比奈泰能に声をかけた。備中守とは泰能のことだった。

「鷺津を攻めよ」

それからその微笑を消さず、今度は松平元康（徳川家康）を見て、

「この前も申した通り岡崎衆には丸根砦をまかせる」

と一同に言った。

鷹揚な言いかただった。その声には微塵みじんの不安もなかった。

言いかえるならば、この小さな二つの砦など本隊を動かさずとも簡単に片づく、という自信が義元にも重臣にもあったのである。

「戦いは明日、朝早くより始めよ」

「畏かしこまりました」

と元康は一礼をして立ちあがった。彼は自分の手勢である岡崎衆二百人に今夜は充分な睡眠を与えておきたかった。

「清洲きよすはいまだに動く気配はありません」

と偵察隊の報告を受けた義元の妹婿・浅井政敏が報告にきた。

「信長は臆おそしたか」

と義元は笑った。

「われら三万の大軍に信長は集めて三千、臆するのは当然にございます」

と政敏も他の重臣たちも笑った。この戦は決して負ける筈はない、と誰もが信じていた。

「もとよりわれらの動きを信長もよう存じておりましょう。あるいは意外な策をもちいてくるかも知れませぬ。油断はなりませぬ」

と葛山信貞は、笑い声をたてた同輩たちをたしなめた。

義元は微笑して、

「信貞の申すこと、もったものである」

とうなずいたが、彼自身、信長が奇策を用いるとは考えていなかった。

丸根砦の守将は佐久間大学盛重だった。

今川の大军が沓掛に本陣を移したことを盛重は既に知っていたから、十八日の夜は特に警戒態勢をきびしくして敵の動きを待った。

この夜はむし暑かった。

全員、軍装のまま、闇のなかで息をこらした。

その闇がしらみはじめた時、

「眠るな、眠るな。敵は朝がたに参るぞ」

盛重は長い緊張のあと、朝の訪れに部下の気がゆるむのを恐れて怒鳴った。

だが、それだけではなく、彼の直感に敵があけがた攻めてくると感じていた。攻めてくるとしても、むし暑い日中は避けると考えた。

予感通り――

午前五時頃、砦をかこむ森で小鳥が騒ぎはじめた時、物見の櫓から半鐘がけたたましく鳴り、

「敵が見えます。敵に、ござります」

見張りの叫びが右からも左からも聞えた。

「敵の数は」

と盛重は大声で怒鳴った。

「二千ほどにみえます」

二千か。すると実数は千か千五百だな、と盛重は思った。

見張りの者は狼狽しているから、その眼には実際の数より多くうつることを彼は知っていた。

ただちに彼は清洲城に使いを出した。そして、昨夜、部下で武者頭の服部玄蕃が、

「城にこもるよりは討ち入り、死を免れた者は信長公に合流すべきと存じまする」

と言った献策通り、

「城門を開け、騎馬の者を先に立てて、足輕は槍をかまえて攻め入れ」

と整列した四百の将兵に命令をくだした。

軋んだ音をたてて砦の門がゆっくり開いた。

砦の東方に陣を布いた松平元康の率いる岡崎勢はただちにこれを迎え討とうとした。しかし元康は両手をひろげてこれを制した。

「敵、少数なれば城を守って防戦すべきに、かえて突いて出るは一戦に有無を決せんとする計略なり。輕率に戦うべからず」

彼は千五百の部隊を本隊、奇襲隊、旗本の三つに分けた。やがて喊声をあげて丸根砦の織田勢は城門から討って出てきた。

彼等は清洲から救援が来ぬのを知っていた。この岡崎勢を倒しても、今川義元は大兵を投入して攻撃してくるのも知っていた。だから死に物狂いだった。

全滅覚悟で戦う敵ほどこわいものはない。両軍は文字通り激突し、もみあった。あちらの林こちらの窪地と、死闘がくり広げられた。一時、松平勢は押され何人かの騎馬の者を失った。

怯んだ彼等がもちなおしたのは、元康がかくしていた騎兵が横合いから突っこんだからである。

盛重以下、ほとんどの丸根砦の将兵が戦死した時、朝になった。

丸根砦が松平元康の率いる岡崎勢に攻撃を仕掛けたのは十九日、早朝だったが――
前夜の十八日。

夕刻から清洲城には重臣たちが続々とつめかけていた。彼等は今川の大軍が既に沓掛まで押しよせてきていることを承知していたから、不安の色をかくせなかった。

広間につめかけた一同は信長が現れるのを待った。

だが、肝心の信長は広間に姿をみせない。

「いかが、なされた」

とたまりかねて馬廻り衆の毛利敦元が小姓の森小介にたずねると、

「ただ今、坐禅をなされておられます。もうしばらくお待ちくださいませ」と小介は答えた。

広間には燭台が運ばれてきた。酒も運ばれてきた。

「皆さまがた、存分に酒をおすごしなされますよう、殿の御言葉にございます」と森小介が言う。と広間はざわめき、一同は不審な顔をした。

敵が眼前に押しよせているのに、酒を飲めとは冗談にもほどがあるからだ。半刻たって、ようやく信長が上座に姿をみせた。

「殿、敵は沓掛に本陣をおきました」

とたまりかねて林通勝が言上をした。

「沓掛か」

信長は首をかたむけ、何かを思いだすような表情をした。

「すると明日にも丸根や鷺津を攻める所存だな」

「あのあたりの潮の満干から申しまして、明日の朝でございましょう」

信長は酒をつがせ、

「皆も飲まぬか」

とすすめた。

「軍評定いくさひょうじょうのあとで頂戴いたします」

と林通勝は苦い顔をした。彼はもはや信長を侮ることはなかったが、信長の心の動きをはかりかねた。

「評定か。ではそれぞれ意見など申してみよ」

「敵は三万、味方は三千にも足りませぬゆえ」

と通勝は答えた。

「平地では勝つ見込みはございませぬゆえ、清洲城に敵を引きつけて戦うてはと存じます」

「籠城も援軍なく長びけば、やがては飢え、疲れる」

と信長は酒を一口飲み、

「はて、さて、如何したものか」

皆は沈黙した。こういう時、総大將が一同の不安を消すように断をくだすべきなのに、信長